

4 職員研修

(1) 大学図書館職員長期研修について

- ① 主 催：筑波大学
- ② 日 時：令和元年7月1日(月)～12日(金)
- ③ 会 場：筑波大学春日エリア情報メディアユニオン2階 情報メディアホール等
- ④ 受講者：国立大学・大学共同利用機関 27名
 公立大学 1名
 私立大学 4名

(2) 研修報告

令和元年度大学図書館職員長期研修報告

神戸市外国語大学 学術情報センター 飯島祐子

令和元年7月1日から12日の間、大学図書館職員長期研修に参加した。大学図書館に関する広範な領域の講義に加え、問題把握および解決の手法を集中的に学んだ上に、さまざまな大学図書館職員の知己を得られた本研修はたいへん有意義なものであった。研修を終えてあらためて強く意識したのは、大学図書館は、大学の一組織としての貢献のみならず、大学内外における変化への対応を今後一層求められるということである。ここでは、本研修の概要を「講義」「演習・班別討議」「事後課題」の3つに分けて報告する。

講義

講義は、図書館マネジメント総論7科目、学術情報流通等各論12科目の計19科目で、大学や大学図書館を取り巻く最新動向から今後のサービスの参考になる実践例まで幅広い内容の科目を受講した。

図書館マネジメント総論では、大学経営・大学評価・図書館経営・大学と大学図書館・国立大学および私立大学図書館・大学図書館職員など、さまざまな角度から大学図書館と職員が置かれた現状と課題を把握するとともに、マネジメント的視点で今後の方向性を考えることができた。また、学術流通等各論では、学術情報コミュニケーション・研究支援・学習支援・アクティブラーニング・障害のある利用者へのサービスなど、各テーマに関する最新の動向や事例を集中的に学んだ。

なお、講義資料は筑波大学の機関リポジトリ「つくばリポジトリ」から参照されたい。

つくばリポジトリ <https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/>

附属図書館 (Library) > 大学図書館職員長期研修 > 令和元年度(2019)

演習・班別討議

ワークショップ：

第1週の後半は、「新たな取り組みの創出・実践ワークショップ」と題し、民間の講師によるワークショップが行われた。大学図書館における環境変化を受講者同士で共有しながら、現状分析の手法やカードによる発想法などを用いて、グループごとに自由な発想に基づく大学図書館の新たな取り組みを企画し発表した。ワークショップは終始和やかな雰囲気が進み、受講者間で活発に意見が交わされた。

班別討議：

第2週は、ワークショップで学んだ手法を踏まえて、新たに編成されたグループで「国立大学図書館協会ビジョン2020」の基本理念を達成するための新たな取り組みを企画書にまとめて発表した。ワークショップとは異なり、新規性と同時に実現性も求められ、発表後の教員と管理職による講評では、厳しい指摘を受ける班もあった。講評では特に、図書館は大学の一組織であることを常に意識し、他部署と協調して仕事を進めること、また、図書館が企画を立てるときは、大学・図書館・利用者それぞれの課題を十分に把握し、国の動向も踏まえながら、根拠に基づいた企画を進めることの重要性が強調された。

事後課題

事後課題は、所属大学のミッションや中期目標を踏まえた自館の目標とその実現に向けた取り組みを企画書にまとめて職場に提案し、上司・同僚から寄せられた意見やコメントを受けて企画書を修正するとともに、その過程を報告書にまとめるというものである。

今回の研修で繰り返し指摘されていた「大学への貢献」を念頭に置き、本学の理念「行動する国際人の養成」を実現するための諸活動の支援を目標に掲げた。一方、学内の情報共有における課題にも着目し、図書館を媒介とした学内構成員の交流および情報の共有、さらに、図書館の利用促進を目指した企画を提案した。今回は課題として提案したが、課題で終わることなく、実現に近づけるよう努力したい。

2週間の研修を通じて、大学および大学図書館、そして、自分自身が置かれた状況や役割を再確認することができた。大学図書館に大きな変化が迫るなか、図書館の新しい価値をいかに創造するか、今回の研修の経験を糧に、あらためて考え実行していきたいと思う。

最後に、貴重な機会を与えてくださった公立大学協会図書館協議会に深く感謝申し上げるとともに、長期に渡る研修に快く送り出し、支えてくれた職場の上司ならびに同僚に心からの謝意を表したい

(3) 大学図書館職員短期研修について

- ① 主 催：京都大学
- ② 日 時：令和元年10月1日（火）～10月4日（金）
- ③ 会 場：京都大学附属図書館
- ④ 受講者：国立大学 14名
 公立大学 5名
 私立大学 4名

(4) 研修報告

ア 令和元年度大学図書館職員短期研修報告

金沢美術工芸大学 木戸晶子

令和元年10月1日から10月4日まで、京都大学にて開催された大学図書館職員短期研修に参加した。大学図書館の課題や学術情報・電子コンテンツに関する講義とグループ討議（演習）について、一部を紹介するとともに、印象に残った事柄について報告する。

令和元年度講義概要（京都大学）<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/mainlib/tanken/>

大学図書館の現状と課題

大学図書館の置かれている状況と解決のための方策について、基準となる法制度や大学図書館界の動向及び先進館の取組状況について説明があった。

とりわけ職員の育成について、大学図書館職員は学習支援や学術情報のオープン化推進などの課題を解決するために、蔵書評価に携わる「キュレーション」能力や、人と知識と情報の相互作用を促す「ファシリテーション」能力が求められること、職員の資質向上が図書館の機能強化の鍵となることを強調された。そのためには自ら情報を収集し積極的に学習し続けていくことが重要であると特に言及があった。また、大学図書館職員の特徴として、学外の各種図書館職員との交流、活動の機会が多いという利点があるが、反面、大学職員であるという自覚が弱いと指摘があり、まず大学全体の将来像を描き、そのなかで図書館が果たす役割を考えていくよう助言を受けた。

関係法規、各省庁の基本計画、各種学術審議会、大学中期計画の実例及び「国立大学図書館機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン2020～」について包括的、具体的な説明を受け、今後の業務に取り組んでいく際の骨格となる知識を得ることができた。今後、日常業務の処理に傾注するあまり大学図書館の本質的な目的、目標を見失うことのないよう、この講義で得たことを大切に、活かしていきたい。

学術情報、その他各論

デジタルコレクション、オープンサイエンスといった電子学術情報の最新動向の他、リテラシー教育、目録実務、リスクマネジメントなど図書館職員として必要な知識や、スキルアップ法などについて講義が行われた。

「学術情報リテラシー教育の現状」では、情報探索力の優劣が研究に大きな影響を及ぼすため、学生がより優れた成果を得られるよう、図書館職員による積極的な支援が必要との説明があった。講師の実践事例とともに、各大学での取組事例（大学院生が図書館スタッフとして学部生のレポート作成を支援する、図書館職員が教員と協働し、正課の必修科目として情報探索法を指導する等）が紹介された。当館での取組は、一部専攻の講義中に図書館ツアーとしてOPAC等の利用説明を行う簡易なもののみで、全学的な実践には至っていない。今回の先進館の報告を参考とし、いずれ取り組んでいきたいと考えている。

グループ討議

本研修で最も長い時間を割いて行われたのが、グループ討議である。事前に与えられた複数のテーマからひとつを選びレポートを作成し、それを基に討議を行い、より優れた方策を導き出すもので、報告者はテーマ「地域連携による大学図書館の改善を企画する」のグループに参加した。演習では、メンバーそれぞれが作成したレポートからグループとして提案するプランを決め、それを改良し、プレゼンテーションを行った。メンバーのレポートは、高大接続、圏域図書館間連携、他機関との連携（博物館、地域団体）などについて論じられ、どの館も関心を抱くテーマでありひとつに絞るのが難しかったが、最終的に「高大接続」を選択し、受験生確保のために図書館職員と教員の協働、保護者・高校生への周知と学生への学習機会提供、大学と教育委員会・各高校との連携を図り、最終的に関係団体全ての利益を目指す案を完成させ、他の講義で指摘を受けた「大学職員としての自覚」を十分意識した企画にできたと感じている。図書館管理職による全体講評では、図書館独自の外部資金調達や異業種間連携など、視野を広げ、新機軸を打ち出すことの重要性を強調され、活気ある図書館とするためには職員も活力旺盛でなければ、と改めて感じた。また、事後課題では、事前に提出したレポートにグループ討議を経たうえでの修正を加え、改善版を提出した。

その他

最新情勢や他大学の実践状況について学ぶことができ、とても充実した研修であった。今回の研修で得た知見を役立て、自館の改善、発展に繋げていけるよう努力していきたい。

また、研修では大学の規模や学部の種類、利用率、地域開放の状況などさまざまな違いのある図書館職員が、他館の実務者の話を聞き、互いの館で抱える悩みにうなずきあい、また、自分では見えていなかった自館の優れた点や改善案を教え刺激しあうなど、職員どうしの連携を強く感じることもできる、非常に得難い体験であった。ぜひ他の会員館職員にも積極的に参加してもらいたい。

最後となったが、今回の研修派遣にあたりご賛同いただいた公立大学図書館協議会に深謝

するとともに、快く送り出してくれた職場の上司、同僚に改めて感謝の意を表したい。

イ 令和元年度大学図書館職員短期研修報告

大阪市立大学学術情報課 長沖愛美

本研修の到達目標は、国内外の大学図書館等における最新の動向や事例を学び、業務推進及び改善について、主体的に考えることができるようになる、ということであった。

講義に通底するテーマは2点であったと思う。1点目は学術コミュニケーションの変化、2点目は大学自体が置かれている状況だ。大学図書館は永く“蔵書の館”として知識基盤を形成する唯一無二の存在であったが、電子化及びそのネットワーク化を核に、“学術情報のハブ”としての、新たな存在意義、方法論を模索する必要に迫られている。さらに、大学自体も存亡をかけてビジョンや成果を示さなければならない昨今の状況下においては、大学図書館もまた、内外に対してその卓越性と貢献を示さなければならない状況にあるということだ。

講義とあわせて大切な研修のテーマであったのは、背景等も様々に異なる各館より参集した同年代の面々とのグループ討議を含む交流だ。普段はなかなか叶わないことでもある。ディスカッションのなかでは、急に腑に落ちることがあったり、新たな展開が生まれることも実感でき、傾聴すること、人前で話すこともよい経験であった。

また、グループ討議の講評も印象に残った。「地域貢献が命題となっている大学であれば、もっと身をきってでも取り組む覚悟で臨んでいる」「計画の実施、さらには継続にかかるマンパワーが想定されていない」や、「どこかにきらりと光る、何かときめきがほしかった」など、講評者から各グループに対して、まさに忌憚のないご意見を頂戴した。主体的に考える、つまり落ち着いたよい計画にとどまらず（もちろん前提として踏まえられるべき点はあるが）、真に当事者意識をもって考えてみてほしい、計画の枝葉にとらわれず、何を目的としてなされるのか、という大きな視点からも柔軟に考えてみてほしい、というメッセージとして受け取った。

研修全体を通して、知識のみならず講師や同じ受講者のマインドから多くを学んだ。

大学図書館は過渡期にあるが、一方で選択肢、可能性は多種多様であるともいえる。各館に応じた知識基盤の継承、及びそのキュレーションを担えるのは図書館員だと信じて、今後も微力ながら一つ一つ楽しく取り組んで参りたい。

最後になりますが、研修への参加に際し、ご助力いただきました皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。とても有意義な4日間でした。

ウ 令和元年度大学図書館職員短期研修報告

北九州市立大学図書館学術情報課 石原由貴

2019年10月1日から10月4日までの4日間、京都大学附属図書館で開催された大学図書館職員短期研修に参加した。大学図書館の現状と課題から図書館職員のスキルアップ法、大学図書館におけるリスクマネジメントなど様々な内容の講義を12コマ受講したほか、事前課題を踏まえたグループ討議及び成果報告に取り組み大きな学びの機会となった。学術情報の潮流は速いため、少し遅れてしまうと利用者サービスへも影響が出てしまうと感じていたが、今回の研修会ではそうした潮流を少しでも掴むことができたのではないかと思う。この度の報告では様々な講義の中で特に印象に残った講義について少しご紹介したい。

まず「学術コミュニケーションの動向について」では、オープンアクセス・オープンサイエンスに関する最新情報を得ることができ、大変大きな学びとなった。以前からオープンアクセス・オープンサイエンスに関する話題はよく耳にしていたが、まだまだ理解できていない部分も多く、利用者サービスにどのように活かせるか掴みきれていなかった。そんな中、講義の中で今後図書館職員は“デジタルライブラリアン”としての役割が求められるようになるとの話を聞き、これからは利用者や研究者と情報を繋げる存在に司書がなっていかなければならないのだと強く意識した。

次に、「情報リテラシー教育の現状」では京都大学で実施されている情報リテラシー教育について知ることができた。研究・教育を担う京都大学の高度な情報リテラシー教育の内容に触れることで、自身の課題でもある当館での情報リテラシー教育についてもっと考えなければならないと感じた。中でも印象的だったのは、講習会の内容が同じものの踏襲になってしまい伝統芸能の様になっては意味がないという言葉だ。実際、当館でも以前からの講習会の方法・内容を踏襲するばかりで中々講習会を見直す事ができていなかったため課題があると感じていた。今後利用者のためにどのような情報リテラシー教育をしていくべきか、誰のため、何のための講習会なのか考えて行く良いきっかけとなった。

最後に、本研修は国・公・私立の様々な職員が参加しており、多種多様な立場から様々な話を聞くことができた。講習内容についての話だけでなく、自館の抱える課題を他館の現状と照らし合わせる事ができた事は大変有意義な時間となった。また、グループ討議の場では、意見の多様性を引出し尊重していく手法を身に着ける機会にもなった。様々なアイデアや意見をまとめ発表する難しさを感じると同時に、自分だけでは得られなかった考え方やアイデアを得られたことは非常に大きな学びとなった。

この度の研修では、自分だけでは学ぶことのできない様々な内容を学ぶことができた。この研修に参加する機会を与えてくださった公立大学協会図書館協議会の方々と、有意義な研修の場をご用意くださった京都大学附属図書館の方々に、心から感謝の意を述べたい。また、研修に参加するための時間を作ってくれた職場の同僚には感謝するとともに、今回の研修で得た知識を共有し、全員の力の底上げができるよう努めていきたい。